小林市文化財調査報告書第２集

東二原（ひがしにわら）地下式横穴墓群

県営二原地区圃場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1990

宮　崎　県

小林市教育委員会

序

小林市教育委員会では、平成元年度二原地区県営ほ場整備事業に伴い、西諸県農林振興局の委託を受け、宮崎県文化課の協力のもとに遺跡の発掘調査を行いました。その結果、東二原遺跡は、16基の地下式横穴墓群と直径20mの円墳から構成され、鏡や貝輪を始め多数の副葬品が発見されました。これらの円墳や出土品は、いづれも小林市では始めての発見であり、県内でも出土例はきわめて少ないといわれています。

小林市教育委員会では、これらの貴重な資料をもとに、本市の古代史解明の手がかりにしたいと考えております。

また、この遺跡の重要性に鑑み、現状の保存を二原土地改良区に申し入れましたところ、協力してくださることになり、さらに今後は、文化の向上のために公園化する計画でありますので、市民の憩いの場としても広くご活用くださいますようお願い申し上げます。

なお、調査にあたって、御理解と御協力をいただいた二原地区土地改良区、西諸県農協振興局、宮崎県文化課等関係各位に対し、深甚の謝意を表しますとともに、発掘作業に従事くださいました皆様に対しても厚くお礼を申し上げます。

最後に本書が、社会教育・学校教育の場のみにとどまらず、広く活用されることにより、本市の文化財保護に対する理解と認識が深まれば幸いに存じます。

平成２年３月

小林市教育委員会

教育長　山口　寅一郎

例　　言

1．本書は、小林市二原地区の県営圃場整備事業に伴ない、平成元年度に実施した東二原地下式横穴墓群の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は、小林市教育委員会が主体となり、県文化課主事長友郁子が担当した。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体	小林市教育委員会		
		教育長	山口寅一郎
		社会教育課長	川畑正一
		同係長	黒木英夫
		同係員	上別府　優
特別調査員	長崎大学医学部助教授		松下孝幸
調査員	県文化課主事		長友郁子
		主査	宍戸　章

4．本書の執筆は、長友郁子・上別府優が分担し、文責については目次に明記している。

5．土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 ……（上別府） 1
　第２節　調査の概要 ……（長　友） 1
第２章　遺構と遺物 ……（　〃　） 3
　第１節　遺　構 ……（　〃　） 3
　第２節　遺　物 ……（　〃　） 3
第３章　おわりに ……（　〃　） 4

挿　図　目　次

第１図　東二原地下式横穴墓群周辺の遺跡分布図 …… 2
第２図　遺構分布図 …… 4
第３図　６号墳遺構実測図 …… 5
第４図　磨研土器実測図 …… 6

表　目　次

表―１　副葬品一覧表 …… 7

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東二原においては、昭和63年12月４日にごぼう作付のためトレンチャーで深耕中地下式横穴墓が発見され、市教育委員会で昭和60年２月25日から３月１日まで県の応援を得て発掘調査を実施している。地下式横穴墓は、１基単独で存在する例はなく、東二原においても地下式横穴墓が10数基は存在すると考えられていた。

宮崎県西諸県農林振興局では、現在、二原地区圃場整備事業を実施している。当初、地下式横穴墓が所存する部分は圃場整備事業地区外であったが、地元の要望により地区内に組み込み、昭和63年度工事を実施する予定であった。そのため、県西諸県農林振興局、二原地区土地改良区、県文化課、市教育委員会の４者で文化財の保存について協議を行った結果、地下式横穴墓は１ｍ程下に玄室が構築されるという構造から工事施工により遺構への影響は避けられないため、工事着手前に発掘調査を行うことになった。しかしながら、昭和63年度は諸般の事情から発掘調査をするのは困難であったので工事を１年延期し、平成元年度に実施することになった。

発掘調査は、通例表土をバックホー等で剥いで遺構を検出しているが、重機使用は地下式横穴墓に影響を与えるので、県内で成果をえている地下レーダーで地下式横穴墓の位置を推定し、その部分から調査を実施することにした。地下レーダーによる遺構探査は県文化課の指導を受け、平成元年12月13日～15日に実施した。その際、三角点のある高まりの黒色土の中にアカホヤ粒が見られ、この部分は盛土で古墳である可能性が出てきた。発掘調査は、市教育委員会が調査主体となり、１次調査は、県文化課主事長友郁子氏の担当で、平成２年１月８日から２月21日まで、円墳部分の２次調査は、県文化課主査面高哲郎氏の担当で、３月27日から29日までの間実施した。

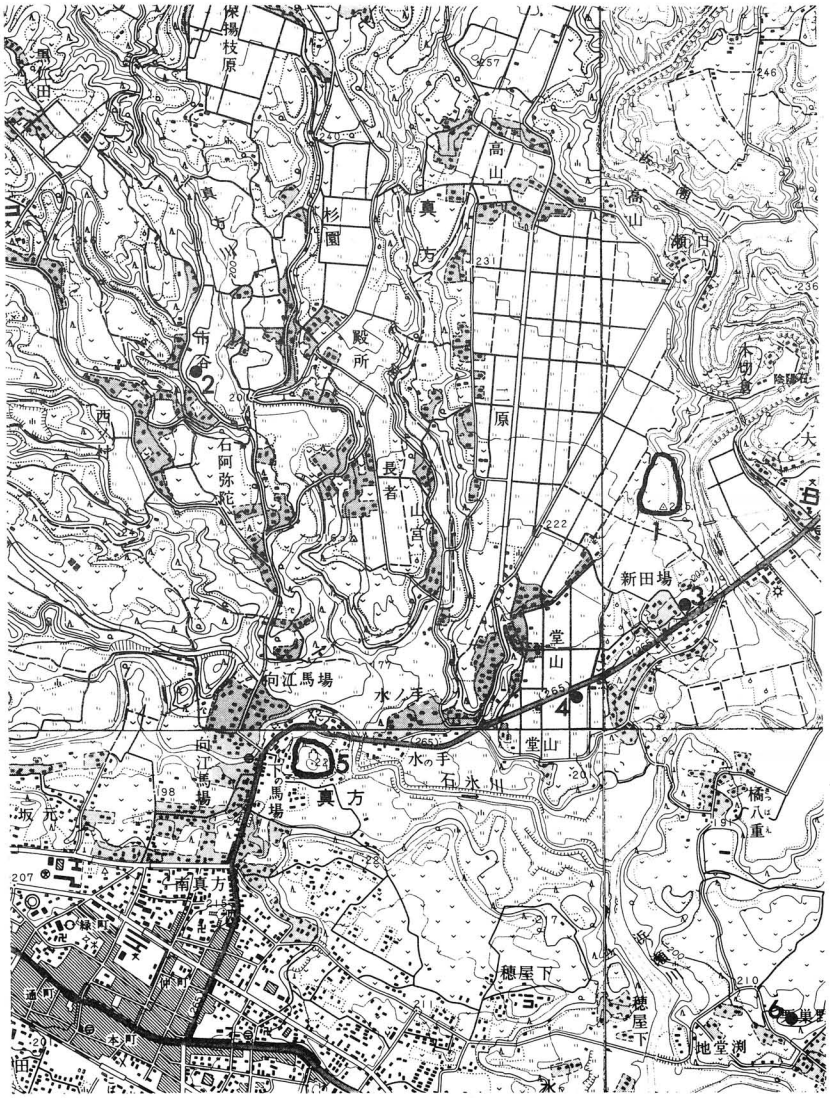
なお、発掘調査により新たに、地下式横穴墓が15基と直径20ｍの円墳が発見され、東二原遺跡は、円墳１基と地下式横穴墓16基から構成される古墳群であることが判明したので、市教育委員会で、遺跡の現状保存について土地改良区に申し入れたところ、理解が得られ地下式横穴墓の大半は、現状で保存されることになった。

第２節　調査の概要

本遺跡は、二原地区県営圃場整備事業に伴い、平成２年１月８日～３月29日まで小林市教育委員会により、26,000㎡を対象に発掘調査された。このうち台地の東端部にあたる約

2,700㎡から、地下式横穴墓が16基（うち１基は昭和60年に宮崎県文化課主任主事永友良典により調査ずみ）検出された。

検出にあたっては、電磁波を応用した地下レーダーを使いあらかじめ玄室や竪坑と考えられる部分を確認したので、人力によりその部分にトレンチを入れ竪坑の位置を確認し発掘するという方法をとった。その結果、15基は地下レーダーにより発見したものである。遺構分布については16基全てが台地の東端部分に集中しており、なおかつ３つの集中部分がみられる。各々のプラン、規模ともに様々な様相を呈している。



第１図　東二原地下式横穴墓群遺跡周辺の遺跡分布図（1／25,000）

1．東二原地下式横穴墓群　2．正覚原古墳　3．新田場遺跡
4．堂山古墳　5．三ツ山城跡　6．栗巣野遺跡

第２章　遺構と遺物

第１節　遺　構

地下式横穴墓が16基検出された。全て羨門部閉塞であり、平入りであった。天井部は切妻型、アーチ型の両方があり、切妻屋根の稜線のみを線刻したものもある。閉塞は、石によるもの、アカホヤ、カシワバンのブロックによるもの、板によると考えられるものがある。石で閉塞されたものは朱を玄室等に塗り、棚状遺構を持つものがある。屍床を持つものは無い。

第３図に示した６号は、浜ノ瀬川の河原から採取したと考えられる細長い河原石を長軸を羨道部に平行になるように入れて閉塞されていた。玄室内部は朱が塗られており、棚状施設を持ちその上に鉄鏃等の遺物が載せられていたが、棚状施設の北西隅は崩壊しておりその部分に置いてあったと考えられる直刀は床面に転落していた。人骨は３体入っており、奥から順に保存状況が悪い。人骨については長崎大学医学部第２解剖学教室助教授松下孝幸氏に調査を依頼した。

調査区北東隅にあり現在三角点となっている場所が周溝をもつ円墳であることも判明したが未発掘のため詳細は不明である。

第２節　遺　物

第４図で示した遺物は全て10号の竪坑と玄室内から出土した。１は丹塗り磨研土器の長頸壺の口縁部から頸部にかけての部分である。調整は外面の口縁部がヨコ方向のヘラミガキで、頸部外面上半はタテ方向のヘラミガキ、下半はややナナメ方向のヘラミガキである。内面は全てヨコ方向のヘラミガキであるが、頸部下半の一部がナナメ方向のヘラミガキである。色調は内・外面共に赤色（Hue 10R　４／８）である。胎土に２㎜以下の乳白色の砂粒を含み、焼成は良好である。２も１と同じく丹塗り磨研土器の盌である。内・外面とも風化気味で調整は不鮮明であるが、外面はナナメ方向のナデの上にミガキの跡がみられる。内面はヨコ方向のナデの上にミガキの跡がみられる。胎土に無色透明の光る細粒子を少量含む。焼成は良好である。色調は内・外面ともに暗赤褐色（５ＹＲ　３／６）である。

３はほぼ完形の磨研土器の盌である。調整は外面の口縁部がヨコ方向のナデの上にミガキを施しており、胴部はタテ、ヨコ、ナナメ方向にナデた後ヨコ方向のヘラミガキを加えている。底部は、ナデの上に粗いヘラミガキを加えている。内面の調整は、口縁部がヨコ

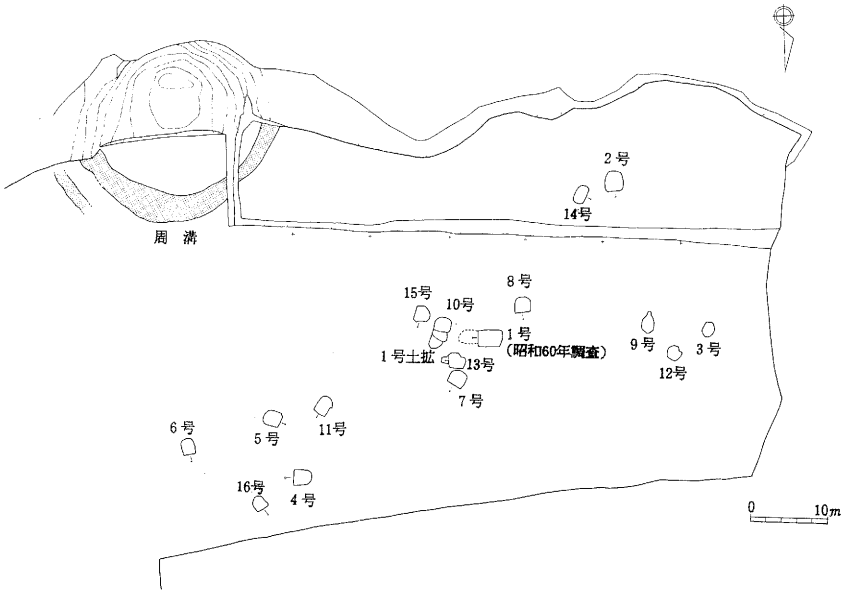
ナデの上にヨコ方向のミガキを加えており、胴部から底部に欠けてタテ、ヨコ、ナナメ方向のヘラミガキが入り混じっている。胴部外面に焼成によると思われる黒変がある。胎土に0.5㎜～２㎜以内の白っぽい粒状のものを含む。焼成は良好である。色調は外面が橙色（５ＹＲ　４／６）、赤褐色（５ＹＲ　４／６）で内面が橙色（５ＹＲ　６／８）である。地下式横穴墓に供献されたと考えられる土器は以上の３点のみである。他の副葬品については表―１を参照されたい。

図版２で示した珠文鏡が２号で出土した。珠文鏡は、直径が5.1㎝の小型鏡である。出土状況としては２号玄室正面奥にあり、すぐ横と真上に刀子があり、後者は棚状施設の壁との接点につき刺さっていた。鏡を持っていたと思われる人骨は既に頭骨の破片しか残っていなかった。また、８号地下式横穴墓１号人骨が左腕に貝輪を４コ嵌めている。同じく８号から骨鏃が17本出土した。各地下式横穴墓からの出土品は表-1を参照されたい。

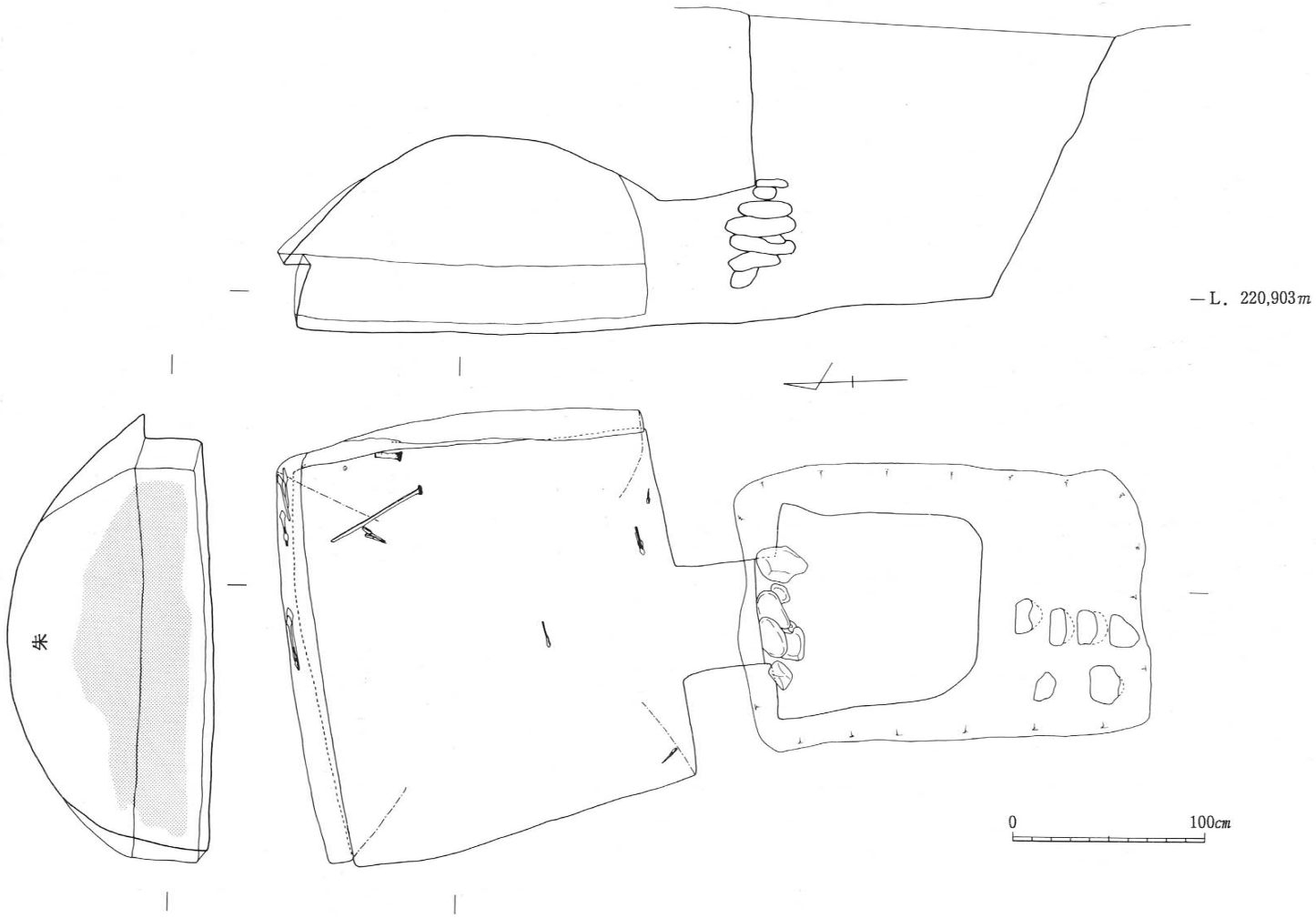
第５節　おわりに

東二原地下式横穴墓群は、出土遺物等から５世紀末から６世紀前半に営まれたものと考えられる。また、鏡をもつ２号の人骨は東二原地下式横穴墓群を造営した人々の長であったと考えられる。

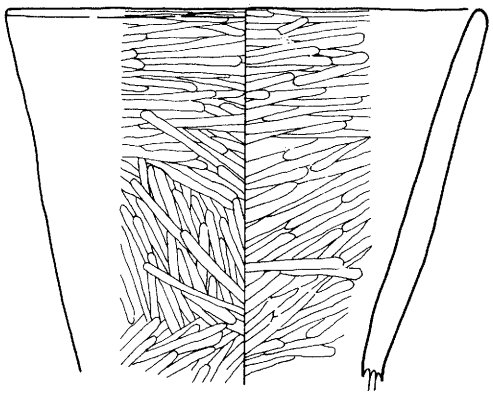
各地下式横穴墓間の時間差や集団構成などの考察は本報告に譲りたい。



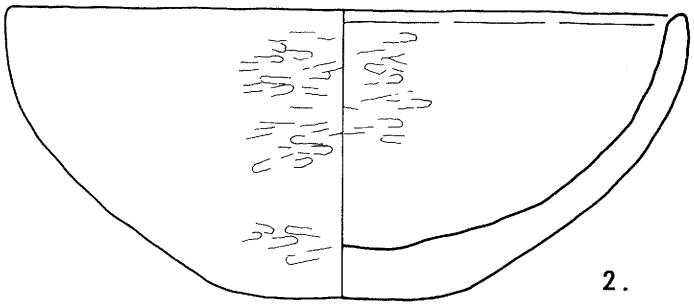
第２図　遺構分布図



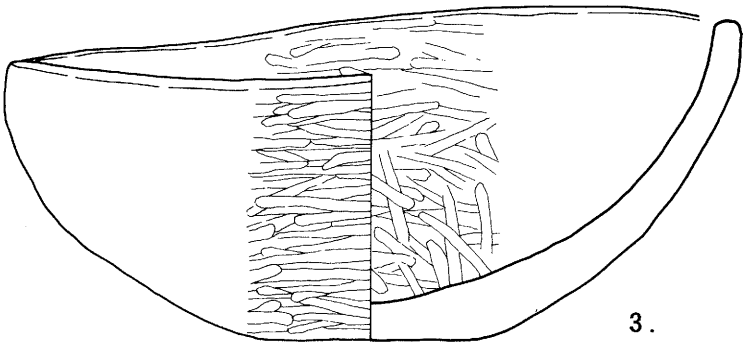
第3図　二原地下式横穴墓　6号遺構実測図



1.



2.



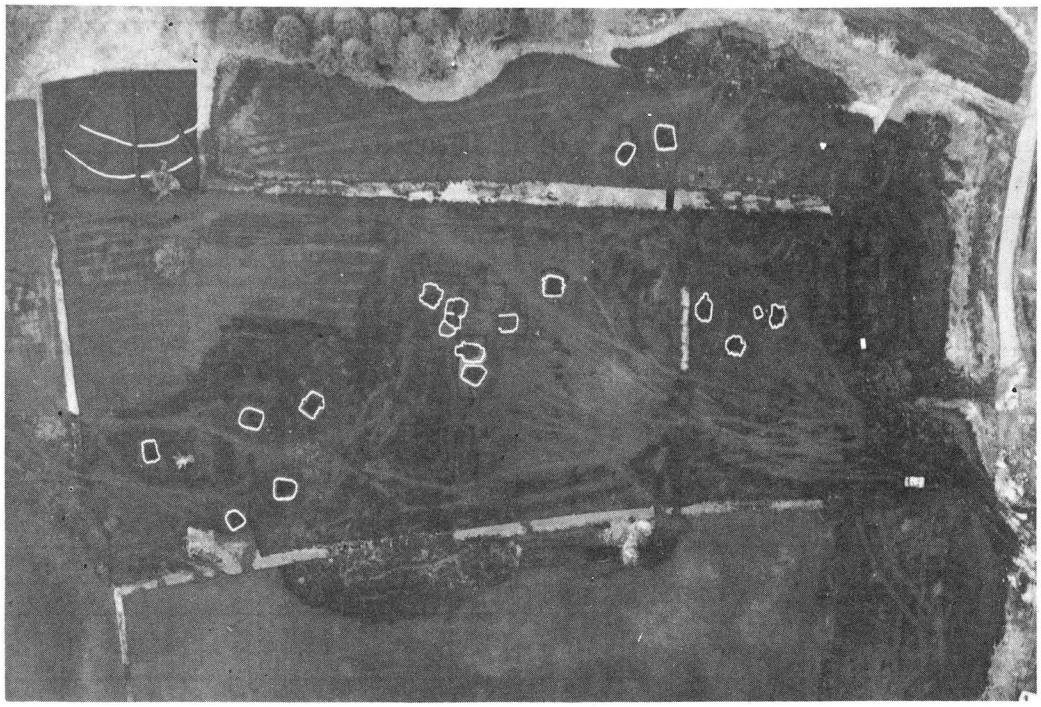
3.

第4図　土師器実測図

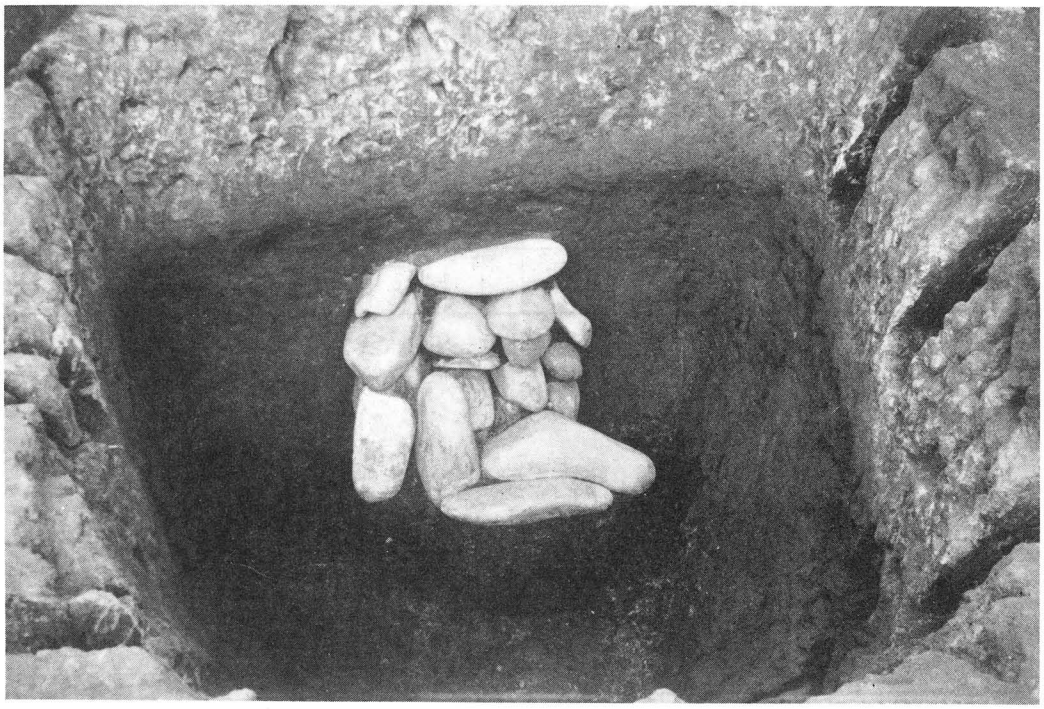
号	鉄鏃	骨鏃	刀子	剣	直刀	鏡	貝輪	朱玉	人骨	備　　考
2	18		2			1			5	直径5.1㎝の小型鏡
3										
4								有		
5	13			1					1	
6	8		4		1				3	
7	1		2							
8	8	17	2	1			4	有	3	
9										
10	約30		3					有		
11	15		3	3	1			有	5	すかしのある鉄鏃…1
12										
13										
14										天井に、切妻屋根の稜線を線刻している。
15	6			1					2	
16	2		2						2	
計	約101	17	18	6	2	1	4		21	

表―1　副葬品一覧表

図版 1



遺構分布状況

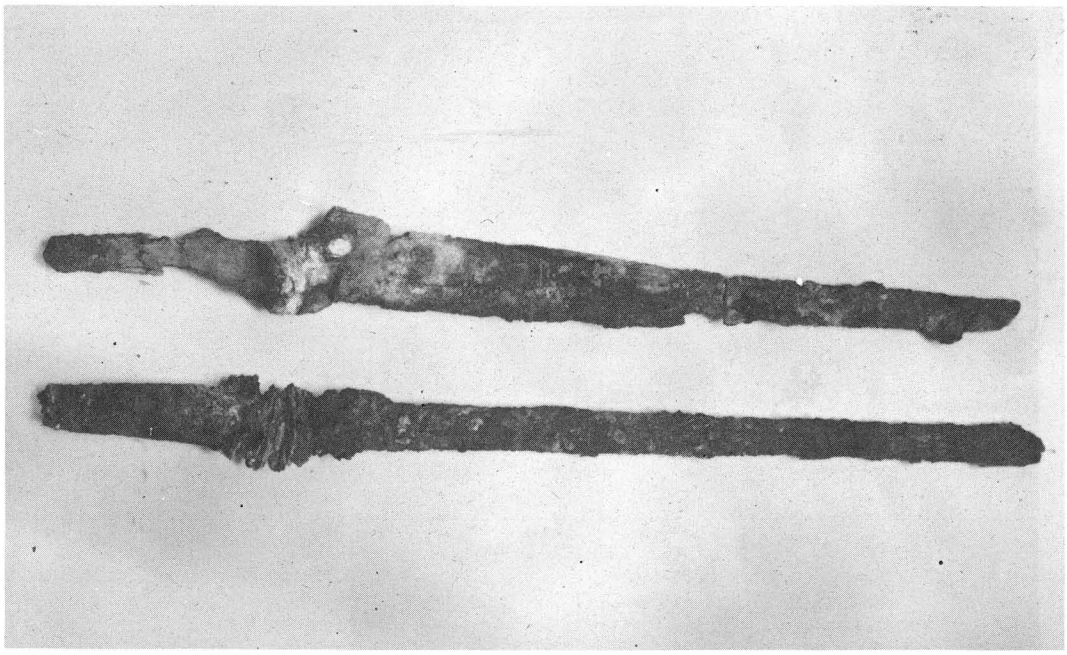


8 号閉塞状況

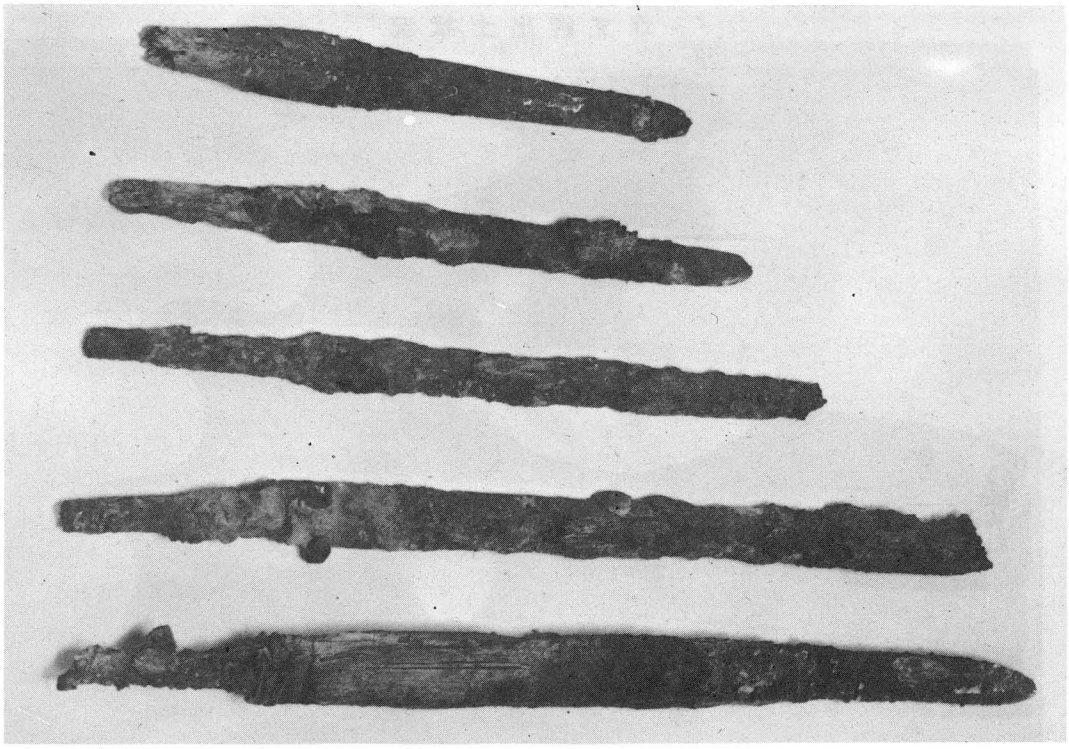
珠文鏡出土状況

貝輪出土状況

図版 3

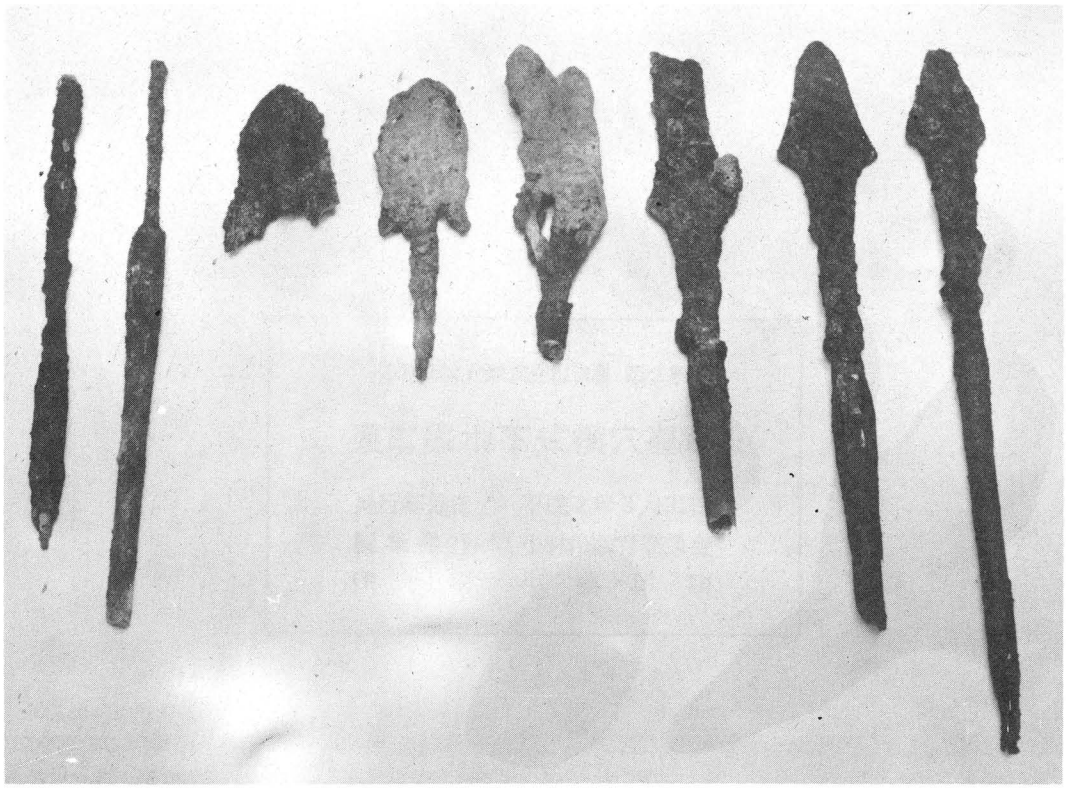


直　　刀



剣

骨　　鏃



鉄　　鏃

小林市文化財調査報告書 第2集

東二原地下式横穴墓群

発行年月日　平成2年3月31日
編集発行　小林市教育委員会
印　　刷　小　薗　印　刷